

植物園と300年の歴史

岩 槻 邦 男 (植物園)

植物園が現在地で発足してから今年で丁度300年になります。先に全面改修の成った本館の御披露を兼ねた式典を、平野総長ほか多数の方々御列席をいただき、10月15日に行いました。いろいろの都合で理学部の方々を広くお招きすることができませんでしたが、また機会を見てお立ち寄りいただきたいと思っております。

東京大学理学部附属の施設である植物園が300年の歴史を祝うということは、官制の上では計算の合わないことですが、植物園のような施設では、その場所がどのように維持管理されてきたかが重要な意味をもつ部分があり、東京大学が開設されるより前から植物園として機能していたということが、都心とは思えない程安定した植生を維持し、研究教育に必要な多様な植物を保有するために大切な条件となっています。その意味で、植物園が300年の歴史の重さを感じるということは、幕末

の御薬園や小石川養生所として機能してきたり、救荒植物としての甘薯の試作地となったり、また、明治以後はイチョウの精子の発見をはじめ近代植物学の舞台そのものであったというような歴史的なできごとを反芻するというだけでなく、300年をかけて培われてきた安定した植生の維持されている園内にどのように多様な植物を保有し、それを活用してどのように現代的な生物学への貢献を行い得るかを問い直すことであります。

社会的にも話題となっております遺伝子資源との関わりで、植物園の在り方は現在改めて問い直されております。マスコミでその問題が取り上げられます前から、附属植物園では、学内外の多くの先生方の御協力を得て、現在の植物園のあるべき姿についての検討を重ねて参りましたが、図書・標本・植生の管理維持のあり方についてそれぞれまとまった提案をまとめていただくことがで

きました。300年の歴史があつてはじめて可能な将来への発展に向けて、それらの提案を実現するように努めたいと考えております。(図書・標本・植生について、それぞれの検討委員会の報告に関心をお持ちの方には報告書を読んでいただけたらと思いますので御連絡下さい。)

植物園は1873年以来一般に公開されており、毎年20余万人の一般入園者に親しまれております。これは欧米の研究植物園でも行われていることで、多様な植物に接することによって、生物が生きているとはどういうことかを学びとってもらうことが本来の意義ではないかと思われまふ。その意味では、いこいの場を提供することを主目的とする植物公園や庭園とは異っているのですが、残念ながら一般入園者にはそのことが充分理解してもらえていゝとは思へません。そこで、研究教育用に栽培されている多様な植物についての見方を一般の入園者にも学び取ってもらふために、いろいろのパンフレットを作つたり、植物のラベルを増やしたりする必要があります。現在の植物園の人員や経費ではそれには充分の対応ができませんが、1979年に小石川植物園後援会が発足し、学内外の多くの方々の御協力を得て、社会教育に対応することが可能となり、大学附置の植物園としての社会に対する役割を果すことができております。

本植物園が300年の節目に当ります本年、植物園における研究教育活動の中核であります本館の全面改修工事を行っていただきました。本館建物

は昭和12年、それまで40年近く園内で研究教育活動をしておりました植物学教室が本郷キャンパスに移転しました直後に着工されましたが、当時の資材不足などの悪環境下で、2年半余の歳月を経て完成されたものと聞いております。元総長内田良平先生御設計の塔のある建物ですが、流石に現在の生物学の研究教育活動には不向きな部分がありましたものを、今回の改修によって機能的に再編することが可能となりました。図書・標本につきましては、この本館に収容するのが良好な状態とは申せませんが、これまでよりははるかに良い条件で利用が可能になりました。300年の歴史をもつ植物園の特性を生かし、新らしくなつた本館で、よりよい研究教育活動に取り組みたいと考えております。

植物園の今日的な在り方として、多様な植物の保有を、国際的な協力態勢を維持しながら進めていくべきことは改めて述べるまでもありません。それは本植物園が好むと好まざるとに関わらず内外の植物園等からも求められることではあります。が、本植物園としても積極的に協力態勢の推進にも努めていきたいと考えております。

300年の歴史の節目に立って、植物園では、大学附置の植物園としてより健全で建設的な発展に向けてますます真剣に取り組みたいと考えております。御協力・御指導を賜りますようあらためてよろしくお願いいたします。